
リリカルテンプレ！

アルター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルテンプレ！

【Nコード】

N3347Y

【作者名】

アルター

【あらすじ】

死んでテンプレなやり取りを神様として五つの願いを聞いてもらってリリカルなのはに転生した主人公は第二の人生をどう生きるのか？

「ほかに転生者がいるらしいが、まあ何とかなるだろ」

第一話 この白い空間は・・・テンプレ！（前書き）

アルターです、活動報告に書いたとおり新作書き始めました。
この小説は作者のリハビリと新しい書き方探しのために書いている
ので書き方がネギまと違います、それでもいいという方はお進みく
ださい。

第一話 この白い空間は・・・テンプレ！

「知らない天井・・・ていうか白い空間だ」

「ようやく目覚めたか」

「うおっ！？びびった、急に現れるなよじいさん」

この白い空間からどこからともなくいかにも神ですという恰好をしたじいさんが出現した。

て言うかこの展開どこかで・・・そうだ！！よくある転生系二次小説のテンプレな始まりかたと似てる。

「その通り、お主は今からそのよくある転生系二次小説のテンプレどおり他の世界に転生してもらう」

「まじかよ・・・ってか俺の心を読んだのか？」

「むろん、わしは神じゃから人間の心を読むなど朝飯前じゃよ」

と言ってほっほっほと笑っている神様、うーんしかし転生か・・・あれ俺の死因は。

「神様、あ俺の死因は何ですか？ やっぱテンプレどおり誰かをかばって「いやちがうぞ」そうっすか。」

「お主の死因はの・・・」

ゴクリ、こんなに引つ張るなんてろくでもない死にかたをしたんじ

やないか？ てかこの長さはクイズミリ。ネア並みだぜ・・・

「それは「そ、それは」癌じゃ」

なん・・・だ・・・と！？ 俺はたばこを吸っていた記憶はないし、
かも闘病生活の記憶もないぞ。
どういうことだ。

「お主が癌になったのは、副流煙を吸いすぎたからじゃの、それと
闘病生活の記憶についてなのじゃがあまりに辛くて死ぬと同時に魂
が消したらしい」

「そう、ですか」

まあ、転生前に自分の死に方を知っておきたかったただだからな・・・
しかし癌か家族やいろいろな人に迷惑をかけてしまったな・・・

「俺の死因を教えてくれてありがとうございました、もう転生先に
飛ばしてかまいませんよ・・・テンプレみたいに落とし穴でw」

「さらつと転生方法を指定しおって・・・その前に何か忘れておら
んか？」

「え〜とそれって何かの能力を決めたりする奴ですか？」

「そうそうその事じゃ、どうするわしが叶えられるのは五つじゃ」

う〜ん能力か五つもいらなんだが・・・そうだ！どんな世界に行く
のか聞いてないぞ。

行く世界によっては意味のない能力とかがあるからな、俺が行く世

界を聞いてからきめよう、うんそうしよう。

「というわけで、神様俺の行く世界はどんなところですか？」

「そうじゃの、言つのを忘れておったわい」

「で、どんな世界ですか？行く世界によって能力を決めるんですから ハリー！」

「お主の行く世界は・・・・・・・・・・」

ゴクリ、こんなに引つ張るなんて、もしかして魔王が居る世界や悪の秘密結社が存在している世界なのか・・・あれ？さっきも似たようなやり取りをしたような？

第一話 この白い空間は・・・テンプレ！（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

この作品にはいろんなネタを入れたりしていく予定なので、間違っていたりしたらご報告お願いします。

能力決め、それとコント（前書き）

サブタイトルはあまり考えずに付けてるだけなので気にしないでください。

能力決め、それとコント

「リリカルなのはじゃー！ー！ー！」

「テンション高いですね神様、リリなの好きなんですか？」

「好きではないぞ、前に送った者たちはこの名前を聞いたら狂喜乱舞しておったのでな、わしもテンション高めにしようと思つての・・
・しかしお主はあまりうれしそうではないな、どうしてじゃ？」

なぜと言われれば、俺には俗に言う原作知識というものがない、まあ原作知識なんてあつても来世がつまらなくなるからいいんだが・・
・俺がリリなのを知つたのが2525動画だつたのだ。

2525の動画を見る限り主人公が悪魔やら魔王、冥王などと呼ばれていたのだ。

しかも俺の見たのは動けない奴にぽつりと一言「頭冷やそうか」と言つて明らかにオーバーキルな攻撃で撃ち落とすものだつた・・・
と以上の事から俺はリリなのがちよつと怖いのだ。

「なるほどのう、まあそれはそうと願いはきまつたのか？」

「また心の中を読んでたんですか・・・ま、いいですけど、能力は何がいいかな・・・・・あれさつき前に送った者たちつて言つてましたよね？」

「そうじゃ、お主の今から行く世界にはお主のように転生したのもたちが何人かおるぞ」

まじか、転生者が複数いるときはだいたい戦いになる展開が二次小

説よくあるよな。

てことは、戦いに関する能力は必要不可欠か・・・しかも魔王がいるし死なないように体も頑丈にしてもらわないと・・・あとは他の転生者対策に相手の弱点がわかるような能力がいるかな？それと・

~~~~~

~~~~~しばらくして~~~~~

「おい！、まだ決まらんのかの」

「いや、たつたいま決まりました」

結構時間がかかったけどこれだけあれば魔王対策に転生者対策もばつちりな能力を考えたついたから早速能力を貰おう。

「えーとまず一目はDMC4の悪魔の右腕をください」
デフルプリンガー

「あい分った、悪魔の右腕は転生先の世界で言う魔具・・・ロストロギアの封印・吸収・取り出しを可能と相手の魔法の軽減の能力を付加しておく、それとこの能力はレアスキルということにしておく。」

デフルプリンガー
お、思わぬ強化がされた、これはラッキーだな。

悪魔の右腕は攻撃にも防御にも優れていて腕を伸ばしたり敵を掴んだりできて戦いに向く能力だと思ったから選んだが・・・次も何か付加されないかな？

「ありがとうございます、それで二つ目は体をダンテ並のを頑丈さと身体能力にしてください」

「ダンテ並みということは心臓を刺されたぐらいでは死なんかつたりするのでいいのか？それと身体能力は三つ目になるぞい」

「はいかまいません、予定じゃ最後は何にするかきまってなかったので、それをお願いします。（二つ目はおまけなしか・・・て言うか考え読まれるんだった、ミスったな・・・はっ！？この考えも読まれているじゃないか・・・自重しよう）」

とりあえずそれは置いて、二つ目はダンテ並みの頑丈さがあれば大量出血でも死な無いし心臓や頭を狙われてもモーマンタイだからな。

三つ目の身体能力は発射ロケランの球に乗ったり垂直の塔を駆け下りたりしていたのでかなり強いと思ったからだ。

「四つ目と五つ目はもういいのかの？」（#^ω^）ピキピキ

やべーよ、神様めっちゃ怒ってるじゃん何とか許してもらわないと四つ目と五つ目が無くなってしまう。

謝るしかないか、やあああつてやるぜ！

「失礼なことかんがえてすみませんでしたー！！」

THE土下座

日本人の最終兵器を使った・・・これでダメなら能力は無しになつてしまう、神様の反応は・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・残念！」

「ウソダ・・・ウソダンドコドーン!!」

クイズミリオネア（ry

目から心の汗があふれる、四つ目と五つ目の能力がないなんて・・・も、もうだめだぁおしまいだぁ、勝てるわけないよ

（完）

「って、何勝手におわつとるんじゃー!!」

「いや、能力貰えないならこの小説終わりでしょ？」

「なにメタイ事いっとるんじゃ、あと今のはジョークじゃよジョーク」

なんだジョークだったのか、あやうくこの小説が終わるところだった。

これで私はあと10年は戦える！

能力決め、それとコント（後書き）

・・・あれ？能力決めて本編に入るつもりだったのに・・・どうしてこうなった！？

というわけでここまで読んでくれてありがとうございました。
次回には能力決めが終わる予定です。

第三話 願い決定！、ようやく転生（前書き）

能力決めに三話もつかってしまった・・・これからこんな感じで話の進行が遅くなったりすると思いますのでご了承ください。

第三話 願い決定！、ようやく転生

「というか、早く四つ目と五つ目の願いを言ってくれんかのう、そろそろ時間がきてしまうぞ」

「え？時間て何ですか？」

「能力を決められる制限時間じゃよ、自分の体を見てみる」

「俺の体がなんかってんのか？」

ま、言葉どうり見てみるか。

「す、透けてるー」

どんなふうになっているかと言うと・・・早い話千と。尋みたいな透け方してる、っべーこれはマジで時間がない、早く残りの能力を言わなければ！

「お主が、遊んでいるから時間がなくなったのじゃよ、はよ言え」

「いやいや、神様がジョークを言わなきゃ時間はもつとあったですよ」

「そうじゃな、時間がなくなっただのはわしの責任じゃ・・・だが！わしは謝らない！（キリッ）」

「だめだ、この神早く何とかしないと・・・」

てか時間がないとか言いながらも神様も遊んでるんだが・・・そんなことより体がもう輪郭ぐらいいしか残ってない！？。遊んでる場合じゃない、

「ガチでやばいのもう言いますよ、四つ目は武器を自分で作れるようにしてください、五つ目は他の転生者の能力をが分る眼をください」

「そんな物でいいのかの？それに武器ならわしが作るが」

「時間がないでしょうが、素材と知識だけでいいので、それと眼の事はたりないと思うならなんか付けといってください」

「よし、分ったこれで願いはすべて使ったぞ・・・能力の反映も完了した、それでは送るぞ」

「おねがいします！」

俺が言い終わると同時に足元に落とし穴が開いていた、最初のほうに行ってたこと覚えていてくれたのか。

第二の人生か今度は寿命まで生きてやる！ あ、お礼をしなきゃな。

「神様ー！ありがとうございますー！！！」

「ほっほっほ、達者でのー武器の素材はお主が8歳ぐらいに送るからのー」

~~~~~  
~~~~~

side 神

「いったか・・・」

最後に送った転生者と五人目はまともな奴じゃったな、前のに送ったやつらはひどかったからの」

~~~~~回想~~~~~

一人目の場合

「はっ、ここはまさか転生の間・・・転生オリ主フラグ、キタ——  
(。°)——!!」

「最近転生がはやつとるのかのう・・・わしは神じゃ、そこのおぬし、おぬしが転生するのはリリカルな世界じゃ」

「リリなのキタ——(。°)——!!、じゃ早速俺の願いをまず  
「まで、わしが叶えられるねがい」魔力無限にニコポ、ナデポ、  
ゲートオブバビロン  
王の財宝、高性能のデバイスにユニゾンデバイスをくれ」

「じゃから、わしの話を「あと顔はイケメン銀髪オッドアイで転生場所は地球の海鳴で」きけと・・・」

「よし、全員俺の嫁にしてやるぜ」

・  
・  
・

二人目

「この白い空間は、転生オリ主フラグ・・・キタ——(。°)——

「！！！」

「（またさつきみたいなのやつが来たのう）そこのおぬし、わしは「神様ですよ」よくわかったの」

「白い空間に居る老人、神様以外あり得ませんよ」

「（さつきよりはまともそうじゃな）まずおぬしは「死んで転生者になるんですよ？」そのとおりじゃ」

「じゃさつそく、チート能力を「話はまだおわつとらんぞ」\*以下一人目と同じ

~~~~~回想終了~~~~~

という感じでほとんどの者がわしの話を聞かずに自分の欲望をぶちまけてきたからの。

奴らの頼んできた能力はほとんど弱体化させたり数を減らしたりしてやったからの、我ながらいい仕事をしたのう。

その点奴らはわしの話を最後まで聞いてくれたしのう、しかも願いまで謙虚だったしの・・・五人目の奴はコンボの威力増加にして最後の奴は魔力の流れを見えるようにしておくか。

第三話 願い決定！、ようやく転生（後書き）

お待たせしました！次回からやっと本編に入れます。

それではここまで読んでくださってありがとうございます。

第四話（前書き）

＊警告＊

今回から原作キャラが出てきますが、キャラの性格をちゃんと捉えられていないと思います。

それといつもの駄文にさらに磨きがかかっています。

それでもバッチコーイ！という方はお進みください。

第四話

side???

よお！俺だよ、オレオレ、え？分らない？、って詐欺じゃないから早くその啓太から手を離すんだ！

ほら前回まで能力に決めずにいたら神様と喋ってた奴だよ！、ま、ここまで言えば分ってくれたか？

前回神様に、この世界に転生させてもらったんだが気が付いたら三歳になっていた。

な、何を言っているのかわからないと思うが俺も何をされたのか分らねえ＊中略もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ・・・ていうか、普通は自我が芽生えるのが三歳ぐらいだから別に不思議なことじゃないよな。

「そんな難しい顔してどうしたんだ、ネロ」

「いや、なんでもないよクロノ」

「そうか、あと少して晩御飯ができるからリビングに来るんだぞ」

「りょかい」

そうだ、まだ名前を言ってなかったな、俺の名前はネロ・ハラオウン、家族構成は母のリンディ、四歳上の兄クロノ、父のクライドは俺が生れた日にロストロギアの暴走事故無くなったらしい。

つとそろそろ行かなきゃ母さんに怒られるな・・・さっさとリビングに行くとするか。

「ネロやつと来たの、食べないと冷えちゃうわよ」

「ごめん母さんすぐ食べま〜す」

~~~~~ 食事中 ~~~~~

「そうだわ、ネロ明日は本局に魔力検査に行きましょう」

「そういえば、僕も今のネロぐらいの時に行ったっけな」

本局は時空管理局ののだとしても魔力検査ってなんだ？

病院の検査みたいに血を取られたり無駄に長かったりするの？

「母さん、魔力検査ってどんなことするの？」

「それは明日のお楽しみよ」

「大丈夫だ、そんなに時間もかからないし簡単な検査だけだから」

俺の知りたかった事を言ってくれるクロノ・・・マジいい兄だ。

「ということで明日は早く起きるのよ？ネロ」

「はい」

「僕は明日から訓練校だから、まあ後少しで卒業だしね」

「頑張れクロノ」「がんばるのよ」

クロノの言っていた訓練校とは早い話管理局に入る人を集めて実技・

知識などを教えているところの事だ。

俺も六歳になれば入ることになっているし、デバイスを作れるようになる免許も取れるようになるから早く入りたいな。

「あら？もうこんな時間、ネロ、クロノもうお風呂入ってきて歯磨きして早く寝なさい」

「はい」「はい」

~~~~~

sidリンディ

二人の息子が寝室に入ってくのを見て私はふう、と息を吐き一つの写真立てを手に取り語りかける。

「あなたが、死んでからもう三年も経つのね・・・クライド」

そう、あのロストロギア”闇の書”の暴走事故から・・・あの時はあなたが死んだ悲しみを紛らわそうと前以上に打ち込むようになった生れたばかりのネロとまだ幼かったクロノをクライドの上司だったグレアム提督の使い魔乗リーゼ姉妹にまかせて・・・結果として管理局の中でも高い地位が手に入ったけれど不意に自分はなんて馬鹿な事をしているのかと気が付いた。

クライドの忘れ形見でそして何よりも自分の子供をほおっておいて何を馬鹿なことをしていたのが・・・しかしもう気が付いた時には遅かった、自分は高い地位相応の仕事があり、あまり休暇が取れなくなっていたのだ。

その事や、今までではおつておいてことを二人に謝るために、溜まっていた休暇を使い謝った。

その時にクロノは「ぼくが、お父さんみたいになつて母さんとネロを守るからもういいよ」と言われ泣いてしまった、そしてネロは今まで母親と言えるような事をしてこなかったのにもかかわらず、ちゃんした言葉で「お母さん、なかないで」と言ってくれとことで堰を切ったように泣いてしまった。

私につられてネロが泣きだし、そしてクロノも泣きだしてその日は親子そろって大泣きしてしまった。

「それにしても親子三人がそろつてしたことが大泣きなんてね」

ふっ、と笑つてそのに私のデバイスが撮ってくれていたその時の写真のデータを見る、何度見てもひどい顔で泣いてると思う・・・けれどこの時から私たちは”家族”になれたと思っている。

その日から私はこの愛しい家族を守ろうと誓った誰にでもない自分の”魂”に！！

第四話（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。

主人公の名前スルーしてくれると嬉しいです、思いつかなかったの
でこうなりました。

* 雑談

技の確認も兼ねて久しぶりにDMC4のDMDモードをしたらかな
り敵が強くて何回か死んでしまった・・・（特にアグナス戦）

第五話 魔力検査とレアスキル（前書き）

今回は独自設定があります。

第五話 魔力検査とレアスキル

sideネロ

「じゃあ、その台の上に寝てじっとしててね」

「はい」

返事をしながら、今俺が入っている魔力量測定機械を見ている・・・
なんかCTスキャンのすごい版だなと思うぐらいだ。

そして、そんな事を考えていると検査レーザーが頭から足のつま先
までを何度か往復する・・・あれ何往復してるんだ？ 機械が故障
したのか？

「すみませーん、いったん中止します！」

「あら？ なにかあったのかしら」

なんか記録を取っていた局員の人たちが慌ただしく動いてるんだが、
なにかあったのか？

「すみません、ネロ君とリンディさん結果が出たので次の検査に移
ってください」

ありゃ、普通に結果出たのか故障したと思ってけど・・・まあそん
なことよりも魔力量のほうが気になるからな！

「結果を言いますとネロ君の今の魔力量はCランクですね」

「お母さん、これって多いほうなの？」

「そうね、三歳でこれだけあれば十分多いほうよ」

「よし！、そういえばクロノはどのくらいだったの？」

「クロノは、どれくらいだったかしら・・・たしかC+だったと思うけど」

なん・・・だと・・・！負けてるのか・・・。

という感じで落ち込んでいたら記録員の人が希望の光を照らしてくれる。

「リンカー コアは日に日に徐々に大きくなっていくんだ、だから今は少なくとも何年後かは今より魔力量は増えるんだよ」

「そうよクロノも今は魔力量が増えてBランクになっているんだから、落ち込む必要はないわよ」

「そうならそうと早く言ってくれよ！落ち込み損したじゃないか！」

魔力量は増えると聞いて安心したよ、Cのままっただたらクロノが時々見せてくれる魔法なんて使えないと思うからな。

「リンディさんとネロ君」

「なんです？」 「なにか？」

「ネロ君には目と右腕にレアスキルがある可能性があります、特に右腕には本局の機械にエラーを出させるほどのものが」

「なんですって!？」

あ、やっぱさっきのは機械の誤作動だったのか俺のレアスキルのせいだけど・・・右腕といえばデビルプリンガーだよな、そして目は観察眼（仮）だよな。

どうしようか・・・よし!このまま流れに身を任せるとしよう。

「というわけで、つぎの適性魔法検査と並行してレアスキルの検査もする事になりました。」

「・・・わかりました」「はい」

お母さん何か考えてるな、レアスキルがあっても困ることはないと思うんだが・・・

~~~~適性検査室~~~~

「じゃ、まずミッドチルダ式のデバイスから、”起動”と言ってデバイスが光ればミッド適性があるってことになるから、それで光らなかったら、ベルカ式だからね」

記録員の人から杖状のデバイスを渡される。

これがデバイスか・・・と生れてはじめての物に感動していると「がんばるのよー」という母さんの声援が、一言”起動”言うだけなのに何をがんばればいいんだよ!と心の中で突っ込みをいれる。  
よしやってみるか。

「起動!・・・あれ？」

「ではベルカ式ということですね」

ちよおま！母さんもクロノもミッド式なのに俺だけベルカ式とか・  
・ちよっと張り切って言ったのにあんまりだよ、ちくしょう！

「そうですね、せっかくなのでベルカ式のデバイスを使ってみる？  
ネロ君、リンディさんもいいですか？」

「はい、おねがいします。なんだかさっきの息子を見ると可  
愛そうなので・・・」

「・・・おねがいします・・・」

くそう、まあ切り替えよう！次は起動するんだ！キバツていくぜ！

「はい、ベルカ式のデバイス」

「あれ？さっきのとは違ってただの剣みたいだ」

「ベルカ式のデバイスはアームドデバイスと言って武器としての機  
能が大部分を占めているのよ」

そーなのかー、じゃ俺が作るデバイスはだいたい決まったからいい  
や。

よっしゃ！起動させるぞ！！

「”起動”！」

ピカッ！とデバイスが光って光が収ま・・・あれ？だんだん光が大  
きくなっていくんだが！？

「どうなっているんだ!？」

「ネロ、大丈夫ー!？」

やばいやばいやばい、なんかいらんことしたのか?と思って焦って  
いたら光がもう目が開けていられないぐらいになり部屋を飲み込ん  
だ・・・

## 第五話 魔力検査とレアスキル（後書き）

今回のように独自設定が出てくることがあるのでご了承ください。  
では、ここまで読んでくださってありがとうございました。

\*今日の一言

アイマス2いいなあ・・・買うかもしれん・・・

## 第六話 能力確認と制御訓練（前書き）

今回途中で時間が飛びますがご了承ください。

## 第六話 能力確認と制御訓練

前回のあらすじ！

- ・ 時空管理局の本局に魔力検査に行く
- ・ ネロの魔力量判明&レアスキルがあつた様子
- ・ 適性を調べるためにデバイスの起動・・・ミッド式× ベルカ式。
- ・ ベルカ式のデバイスを起動したら光が広がっていく

ここまで！以下本文

~~~~~

sideネロ

部屋を光が覆って何分ぐらい経つたのだろうか、徐々に光が俺の全身に収まっていく。

そして完全に光が収まるとまず視界に違和感を覚えた・・・青白い粒が俺の体に吸い込まれていく？

「ネロ！大丈夫？・・・っ!？」

「なんと・・・これは・・・」

「大丈夫だよ、母さん」

てか、体に吸い込まれている粒が無くなったのに右腕にはまだ集まって・・・そういえば吸い込みが終わったぐらいから体が異様に軽い、ということなの？

それと二人が俺の右腕を凝視してかなり驚いてるんだが・・・俺の右腕が何かなったのか？と考える間にもすごい速さで謎の粒子を吸いこんでいたのが終わってるので右腕見て・・・思考が止まった。

「デビルブリンガー・・・！？」

「知っているのか！？雷電！・・・じゃなくて、ネロ君！」

「ネロ、ということなの？」

「いや、何と云えばいいのか・・・視えてるんです」

そつ、視えているのだ・・・右腕を視た瞬間視界にいろいろなことが浮かんた。

こんな感じに。

名称：悪魔の右腕
デビルブリンガー

使用可能：バスター

使用不可：スナッチ、サーチ、ヘルバウンド、ホールド、????

特殊能力：自分以外の魔力の軽減、魔具の封印・吸収・制御

そのことを話した後の事をダイジェストで！

・右腕が変質しているので精密検査を受ける

・デビルブリンガーは俺が魔力を使わなければ普通の腕になる事が判明

・俺の体はデビルブリンガーの恩恵で新陳代謝が高くなったり身体能力が異常に上がっていた

・本局での検査が終わり家に帰り通信でクロノや、お世話になっているグレアムさんとリーゼ姉妹にこの事を伝える

・リーゼ姉妹がデビルブリンガーと観察眼の制御に協力してくれるついでに魔法の練習を見ってくれることに

という事があった。

そして・・・

~~~~二年後~~~~

「ほらほら、ちゃんと避けるか、右腕だけに魔力を送ってデビルブリンガーを出して防御しないとハチの巣になるよ」

「あはははっ！ロツテ見てよあの必死な顔」

よう！ネロだ、今は訓練トレーニングを受けている、今しているのは魔力弾を避けるかデビルブリンガーで防ぐというものだ、聞くだけなら簡単だと思うだろ？だが現実是非情である。

魔力弾の数が異常なのである、姉妹で協力して俺の視界を覆い尽くすほどの数を作っている。

しかも条件が・・・魔法の強化無し、観察眼常時展開なんだぜ・・・

この訓練を初めてした時は相手の魔導ランクや使ってくる魔法の威力が見えるようになって視界にはいる情報の多さに混乱して開始一秒で撃墜されてからな・・・しかし今は一時間以上持つようになって情報も自分の見たいものだけ見れるようになったからなあ、慣れつつすごいよな。

でもまだデビルプリンガーの制御がいまいちなんだよなあ・・・つてあぶなっ！

「ぎゃあ！あぶねえ　つて！なに笑ってんだアリア！」

「喋ってる余裕があるから数増やそうか？ロツテ」

「そうね、あの様子じゃあと30〜50ぐらい増やして大丈夫かしら」

まだふえる・・・だと・・・！

「このドS姉妹め！」

「「うん？きこえんなあ」」

二人の声がはもった瞬間魔力弾の数が200ぐらい一気増えた・・・やばい、いくら頑丈だからって言っても今の俺は5歳こんな量一気に食らったoutだ。

思い切り地面をけってバックステップをして右腕に魔力を集中する・・・早く出てくれ、いや出てください・・・

「もう諦めたの？ネロ」

「今日もダメだったね」

俺があきらめたと思って、撤収モードになっている二人。  
俺はあきらめてなんてないぜ！現にデビルブリンガーの制御成功し  
そうになってるからな。

「まだ終わりじゃねえー！」

叫ぶと共に右腕が悪魔の腕にかわりその上に巨大な幻影の腕が出現  
した。

「うわ、ほんとに制御しちゃったよ」

「資料の数値より魔力が衰退してる・・・」

「うらあっ！」

デビルブリンガーを突き出し迫ってくる魔力弾を潰すように握ると  
同時に腕の幻影が魔力弾をすべて握り潰した。

「へー、そんなこともできるんだ、使い勝手よさそうね」

「これでやっと次の訓練ができるよ、よかった！よかった！」

「・・・え」？

・・・これは死んだかもしれん。

「まあ、なにわともあれこの訓練はこれで終わりね」

「ここまでよく頑張ったね、お疲れ」

「ありがとうございます！」

とまあ、レアスキルの制御ができるようになったからよかったよ。  
そっだ母さんとクロノに通信でこの事を報告して、グレアムさん  
にお礼を言っておこう。

## 第六話 能力確認と制御訓練（後書き）

土曜日にかなり歩いたのでオレノアシハボドボドダー！みたいな状態になっているので疲労で更新速度が落ちるかもしれません（アイマス2も買ったので）。すみませんm（——）m

## 第七話 休日1（前書き）

一週間も投稿せずにすみませんでした。

思いのほかアイマス2にハマってしまつて・・・代わりに作者のデ  
ンションが上がったので二話連続で投稿します。

## 第七話 休日1

sideリンディ

『じゃあそういうことで、またね母さん』

『ええ、今度の休みはクロノも一緒にとれたから、家族でゆっくりしましょ』

そう言終わるとともに通信を切る。ネロがレアスキル制御に成功した事を教えてくれた、ほんととはクロノと一緒に通信を受ける予定だったのけれど・・・まだ管理局入ったばかりのクロノは仕事はまだ終わっておらずネロの通信に間に合わなかったようね、後でクロノにさっきの通信の伝えなくちゃね。

そう思っていると・・・「クロノです」という声が聞こえ、ドアが開きクロノが入ってくる。

「母さん、ネロとの通信の内容は？」

と少し落ち着かないように聞いてくるクロノ。  
ほんと弟思いねクロノは。

「（こんなクロノを見たらエイミイはどう思っかしら？）そうね、ネロがレアスキルの制御に成功したと言ってたわ」

「そうか、よかった」

そう言っただけで安心した表情になるクロノ・・・ネロに頼まれていたことも伝えないとね。

「それとネロからの伝言よ」

「なんです？」

「へ今度の休みに魔法をの事教えてくれ」だって」

「分りました、その事については後で僕がネロに返事を返しておきます。それでは、エイミィを待たせているので」

いいながら、うれしそうな顔で部屋を出ていくクロノ。

その顔を思いだしながら私は今度の休みの計画を立てるのだった。

~~~~~

sideネロ

あのレアスキル制御訓練いじめから一カ月たった今日、久しぶりに母さんとクロノに会う事が出来る。

あの訓練の後母さんとクロノに連絡して（クロノは仕事だったの仕事が終わった後に伝言の事でokをもらった）その後グレアムさんにお礼の通信をして、その途中で次の訓練では体の動かし方とデバイス無しでの魔法の行使をするというリーゼ姉妹が言っていた。

そのことを聞いてもう三ヶ月後には士官学校に入る事になっているのでそろそろデバイスが欲しいなあと思っていたので今日、母さんにどこかでデバイスを自作できるところがないか聞いてみるつもり

だ。

俺自身も今まで忘れていたが転生前に神様に頼んだ自分で武器が作れる知識があるのを忘れていたので今の状態でどれだけの物が作れるか試しておきたいしな。

「「だだいまー」」

「おかえり、母さん、クロノ」

「じゃあ早速出かけましょうか」

「そうだね、休暇は二日しか取れなかったからね」

二日か・・・デバイスの事は明日言うことにしよう、クロノに魔法を教えてもらった後にぐらいに。

まあ今日は久しぶりに家族が全員そろったんだ、楽しい時間をすごそう。

まず行ったところは、昼時だったので近くの飲食店に来た。
そこでご飯を食べながら最近あった事を話し合う

「私は、特にないわね」

と、母さん

「ぼくは執務官試験を受けるための準備をしている」

と、クロノ・・・って執務官！？執務官って言えば毎年の受験者の合格率が5%未満の試験を合格したやつがなれる超エリートじゃないか！ってか。

「今まで聞いたことなかったぞ！」

「グレアム提督やアリアとロッテがこのまま実践を積んでいけば実技面では早くて三年ぐらいで十分になるしその間に知識も付ければ問題ないと言ってくれたからね・・・今日まで黙っていたのは母さんがネロを脅かそうと言いだしたからなんだ」

「かあゝさゝん！」

「ごめんなさいね、久しぶりにネロの驚く顔が見たかったのよ」

という感じで昼食を終え次の場所に行く

そして着いた場所は・・・遊園地

「でっけーな」

そう、でかいのである魔法がある分アトラクションが派手でスリルがあるのだ。

体が子供だからなのかこういうものでテンションが否応なしに上がってしまふ・・・これが精神は体に引っ張られるということか・・・！

「母さん、チケットは？」

「少し落ち着きなさい、ネロ」

「まったく少しは落ち着け」

というやり取りをしながら園内に入っていく俺たち親子。

ここからは周ったアトラクションをダイジェストで！

・ジェットコースター

「ウルトラデンジャラスマウンテンか・・・お、案内板があるな・・・六歳以上だと・・・!?」

で、わけではかのアトラクションへ・・・今度来たときは絶対乗ってやる！

・コーヒーカップ

「ネロ、目が回ってきたから回すのはやめてくれ！」

俺は今さっきジェットコースターに乗れなかったうさを晴らすためにコーヒーカップを全力で回している。

俺とクロノが乗っているコーヒーカップだけほかのと違い高速回転している気がするが気のせいだ！クロノが止めろと言っているのも気のせいのはずだ！

「ぎゃー！」

・観覧車

コーヒーカップの後クロノがしばらくダウンしていたのでそろそろ帰る時間になってしまったので「最後に観覧車に乗りましょう」と

という言葉で三人一緒に一つのボックスに乗り込んだ。

「今日は楽しかった？ネロ、クロノ」

「楽しかったよ、ありがとう母さん」

「僕としては疲れたけど久しぶりに遊んだから楽しかったよ」

その後母さんの提案で写真を撮ることに、そしてその写真に写っているのは笑顔だった。

~~~~~

~~~~~

こんな感じで一日は終わった。

楽しかったから一日がかなり短く感じたなあ。

明日は最後の休日だから家でんびりする予定だそうだ・・・あれ？魔法を覚えてくれるって話は！？

第七話 休日1（後書き）

アイマス2の一週目はなにも受賞できなくて（・ω・）シヨボ
ーンってなりました。

その時のエンドがかなりこたえました・・・

第八話 休日2（前書き）

次回から一気に時間を飛ばそうと思います。
具体的にはあとがきで。

第八話 休日2

sideネロ

「今日はゆつくり家で過ごしましょう」

「僕もそうするのでしょうか」「ウエー!?」どうしたんだ?」

「いや、魔法を覚えてくれるって約束したよな?」

クロノは一度約束したことを破るような奴じゃないはずだけど・・・忘れてるのか?

「ああ、その事が・・・魔法を教えると約束したな、それは無理だ。」

「ナズエ!ナズエナンドイス!!オレノキタイヲルラギツタンデイスカ!」

「ネロ落ち着いて、クロノにも理由があるのよ。」

ちよつとオンドオル語になっていた俺に母さんが落ち着くように言ってくる。

coolになるんだ俺・・・ふう、落ち着いた。

理由があるなら聞いてやるとするか・・・

「理由としては、そうだな・・・まず魔法にはミッド式とベルカ式があるのは知っているだろ。」

「うん」

魔法を知っている者には常識だ。

ミッド式は中、遠距離での戦いが主流の魔法で管理局に務める魔導師のほとんどがこの魔法を使う。

クロノや母さんもこの魔法を使っている。

ベルカ式はミッド式と違い、近距離で自分やデバイスを強化しての戦闘に特化している。

そして、管理局内での数は少なく、ほとんどがベルカ自治領区にある聖王教会に所属している。

俺の使うのはベルカ式の中でも最近になって確立された近代ベルカ式である。

「・・・なるほど！使う魔法が違うから教えることができないのか。」

「ああ、そういうことだ・・・だから二つの魔法共通の事を教えることしかできないんだ。すまない」

「こつちこそ、その事を忘れていたから・・・ごめん！」

「そうね、今回の事は両方が悪いと言うことで次から気を付ければいいわね。」

「はい」

結局このやり取りの後、クロノにミッドとベルカでほとんど変わら

ない飛行魔法を教えてもらった。

三時間ぐらいやって少し浮けるようになった。クロノが言うにはデバイスの補助があれば問題なく飛行が可能らしい、早く飛んだりするのはある程度の練習が必要らしいが。

こうしてクロノの魔法講座は終了した・・・執務官を目指してるだけあって知識が半端なかったな。

そしてその後は何事もなく時間は過ぎていった。

~~~~夕食~~~~

「そういえば、来年からネロは士官学校よね」

「あっ！」

この母さんの一言でデバイスの事を思い出したので早速でデバイスを自分で作りたい旨を言うことにした。

「母さん、デバイス「デバイスの事でしょ？」え！？なんで分ったの？」

「ふふ、そろそろ欲しいと言ってくるころだと思ったのよ、デバイスはネロが学校でデバイスマスターの資格が取れたら作れるように知り合いに頼んでおくわね」

「って、デバイス自作したい事も知ってた！？」

ということでデバイスマスターの資格を取ればデバイスが自作できる事になった・・・なんで分ったのか聞くと「母の勘よ！」と力強

く言われた・・・母やんには隠さないとはいえませんがもしかしたらね。

いっついで最後の休日も過ぎいく。

## 第八話 休日2（後書き）

ここまで読んでくれてありがとうございます。

前書きに書いたことはいい加減原作に入らないと話が全然進まないからです。

ということでご了承ください。

キンクリした部分は番外編で書くかも、たぶん、おそらく、メイビー

\*今日の一言

アニマスの20話は久しぶりにセルフエコノミーになりました・・・  
”約束”が神曲すぎました。

DLCはよ！

アイマス2の二週目はぎりぎりパーフェクトが取れたのでかなり嬉しかった。

## 第九話（前書き）

今回から原作です、おまたせしました。

今回は書き方変えてます、それとキャラの性格がいまいちつかめてないと思いますが、それでもおk って方はお進みください。

## 第九話

sideネロ

ども、久しぶり。ネロだ、今俺は次元航行船アースラに乗っている。え？意味わからん？・・・まあメタなことを言うと、前の話から六年経っている。これもすべて作者の力量不足が招いた結果なんだ、許してほしい。

で、この六年にあった事を簡単に言うと、まず、学校に入ってデバイスマスターの資格を取るために東奔西走。↓約束通りデバイスの自作をさせてもらえる事に・・・母さんの知り合いのデバイスマスターの名前が、最終物語で飛空艇でも作ってそうな名前だったけど、華麗にスルー。↓訓練を終えるとデバイスの作成、という日々を送り卒業までに作りたかったデバイスが、一つめは、完成。2つ目が試作段階までにできた。↓卒業後そのまま管理局に入り、AAAランクの昇進試験に受かり、クロノの執務官補佐としてこのアースラに乗り、今に至る。

と、まあこんな感じだったわけだ。

「これから向かう世界は魔法文化がゼロにもかかわらず次元震が起こったことを鑑みるとロストロギアがある可能性が高いわ。皆、気を引き締めるように。」

と言ってアースラのクルーに注意を呼びかける艦長。その言葉に  
”はい！”と返事をして気を引き締め直すクルーたち。

そうそう、この艦の艦長は母さんなんだよ、クロノの執務官補佐に

なるように進めてきたのは母さんだったからたぶんいろいろ手をまわして家族を集めたんだろうな……。

「クロノとネロはこの艦の切り札だから特にね」

「はい、艦長」

なぜかデバイスを構えながら返事をするクロノ。

……中二病か……！ 口にはださない。

「艦長、それなら今のうちにデバイスのメンテしておきたいんで整備室使いますよ。」

「わかりました、私から話を通しておきます」

俺のデバイスは新システムを搭載した試作品だからメンテを怠ると起動した瞬間に

ボン！

て感じでオーバーヒートを起こして壊れることがあるからな。やつぱり、普通に流通している素材ではこのシステムの発生させる熱と魔力に耐え切れずに壊れてしまうが……今作っている神様印の素材を使った完成型はそんなこともなく威力も強度も今の数倍になる予定だ……！

「艦長、地球到着まであと三時間です」

「そう、ありがとう、エイミィ」

「じゃあ、俺はメンテに行ってきます。それと、エイミィさん、

現地でのサポートをお願いします。」

「オーケー、ネロ君もクロノ君とがんばってね。」

俺と同じクロノの補佐官であるオペレーターのエイミィさんに、了解！　と言ってブリッジを出す。　時間もあまりないので、そのまま早足になりながらメンテナンスルームに向かった。

「魔力噴射剤に、不備は無っと、あとは・・・フレームの交換が必要か？」

そう、ぶつぶつ言いながら試作デバイスのカリバーンをいじっていると、艦内放送が流れてきた。

【目的地到着まで、あと20分、繰り返す、目的地到着まで残り・・・】

後二十分か、まあ、だいたいのメンテが終わったから、そろそろブリッジに戻るとするか。　そろそろ転異可能領域に入るころだしな。

ブリッジに戻った俺が見たモニターの映像には、今にも戦いだしそうな二人の魔導師がいた・・・あきらかに、ロストログアであろう青い宝石を放置したまま・・・。　って、なにやってんだ、ロストログアを放置したまま戦闘するとか、あいつらほんとに魔導師か！？　自殺行為だぞ。

「なんてことしてるのあの子たちは！？　事は一刻を争うわ、クロノの執務官、ネロ執務官補佐」

「はい！」

艦長の言葉と同時に俺とクロノはデバイスを起動させ、次の指示を待つ。その間に俺はカリバーンの柄の部分についているバイクのアクセル状の所を何度か捻り、調子確かめる。噴射剤のめぐりもいいから問題はない。

「二人は転送ポートで現場に行つてあの二人を止めてきてちょうだい。話を聞きたいからなるべく穏便に。」

「了解!」

「転送ポート、準備完了しました。」

さっきまでキーボードを操作していたエイミーさんが言つのが早い  
か、転送ポートに俺とクロノは同時に飛び込んだ。

## 第九話（後書き）

今回は、原作の管理局の登場の部分の前まで書けました。

多くの二次創作ではクロノがここでもばこられますが、作者はクロノがそこまで嫌いではないのでそういうのではないと思います。

### 今日の一言

急に冷え込んできたので、皆様力ぜにお気を付けください。

作者はもう力ぜひきましたw。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3347y/>

---

リリカルテンプレ！

2011年11月25日02時23分発行